魔法少女リリカルなのは～魔導書《グリモア》の魔導師～

殺生石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～魔導書（グリモア）の魔導師～

【Ｎコード】
Ｎ６８９１Ｚ

【作者名】
殺生石

【あらすじ】
とある魔導書を持つ少年が機動六課で何かやらかすお話。
ヒロイン未定でハーレムはないです。
作者の好みが出過ぎないよう頑張りたいです。
初投稿で、更新もまちまちですが暖かい目で見てください。

プロローグ（前書き）

初投稿一本目です。

・・・短いです、すいません。

とりあえず目標は完結、あわよくば続編ってな具合で行こうと思います。

プロローグ

夢を、見ていました。
夢の中の私は最愛の主人（あるじ）を泣かせて逝くことを酷く悔いていました。
空へと旅立った私は徐々に自分の体が粒子となり存在が朧げになっていきます。
私の一部は十字のネックレスとなり主人の元へ。
残りの体は時期に消えてなくなってしまうだろう。
消えてしまう瞬間、私は願いました。

『願わくば、もう一度だけでもいい。
もう一度だけ、主（はやて）の笑顔が見たい』と。

――――――――――――――――――――――

目が覚めるともう見慣れた天井が見える。
時計を確認すると、デジタル表示の時計は早朝５時半過ぎを示していた。
〈こんな朝早くにどーしたんだんだ？
目覚ましにゃ、まだちと早いぜ相棒〉

枕元から分厚い皮表紙の本が甲高い声で話かけてきた。
「何でもない。夢を見ただけよ。
それよりも、おはようグリム」
〈おう、おはようさん。
我が主鈴里（マスタすずり）〉
挨拶を交わしつつ、ベットから身を起こす。
僕の名前は御綴（みつづり）鈴里。
どこにでもいるただの中学二年、１４歳の少年だ。
ただ、一点ほどただの中学生ではないところがある。
それは、自分が俗に魔法と呼ばれる異世界の超科学を使うことができる魔法使いだということだ。
別に頭がおかしい訳じゃないから医者の紹介は間に合ってる。
確かに自分でも荒唐無稽な話だと思うし、いざ自分が同じ話をされたらあんた達と同じ反応をするだろう。
けど事実なのだから仕方ない。
けど僕はこいつ、異世界（魔導書）の技術の結晶であるグリムこと、グリモアに出会ってしまった。
こいつとの付き合いもかれこれもう七年目に入ろうというくらいか。
グリムとの出会いはしたいずれ話すことにして、僕の住む海鳴は海に面する街でいい街だ。
五年ばかり前に魔法関連で二件、事件が起こっていたが僕には関係ない。
まあそんなこんなあって今は、聖祥大附属男子中学の二年生として

通っている。
家族はいないが居候のお姉さんが二人いる。い
彼女達とは知り合って五年。
居候として一緒に暮らすようになってもう三年と半年になる。
その一人は家族と呼べる人達がいるにも関わらず、恩義に報いたいと、居候している状況なのだ。

「さっさと家族の元に戻ってもらえってことなのかねぇ」

歳に見合わない重いため息を漏らしてしまう。
あんな別れ方をした手前戻り辛いのは分かるし、前に進み出した所で今更、と言う思いも理解出来る。
考えたところで答えるは、彼女自身が決めるわけだから、どうしようもない。
つい、もう一つはため息が漏れる。

〈若ぇー内からため息ついてっとあっという間にジジイだぜ我が主（マスター）〉

悩む主をケタケタ笑うクソ魔導書（グリム）を叩いて黙らせる。
時計を見ると時間は6時前。
そろそろ彼女達も起き出す頃だ。

「今日も一日頑張りましょうか」

〈けけけ、やっぱりジジくさいでっ！？〉

「やかましい」

五年前の事件以来、魔法を秘匿し、陰でコソコソ逃げ回っていた僕は、一つのミスを犯してしまうしていてしまうことになる。

だけどその時の僕は今日も穏やかな日常が待っている。
そう思っていた。

0．5話

鈴里はいつもの散歩道である高台を目指して歩を進めていると、山道を逸れたあたりから何かの気配を感じた。

この海鳴市は都市伝説的な話に、空飛ぶ少女や喋る狐だったり色々あったりするわけで、自身が都市伝説的な存在である鈴里自身、何が出てきても大して驚きはしないし放っておくことが多い。
だが今回はそうも言ってられない様子だった。

『グリム、魔力反応です』

〈オイオイ、こんなとこでなんてぇ馬鹿でかい魔力だよ。
それにこの反応、やな予感がすんぜ許可すっからこっちに被害するかする前に片つけな〉

念話によりグリムとの通信を終えた鈴里はポケットから一葉の栞を取り出す。

「限定解除、コート生成及び結界への割り込み開始」

解除コードと結界侵入を求めると、栞は真紅のコートを纏わせ結界への割り込みを開始する。

本当はグリムを持っていればあれが勝手にやってくれるんだけどただでさえ馬鹿でかい為に目立ってしまう。
はっきり言って持ち運びに適していない。
ただまあ、自身の子機を作る機能があったおかげで持ち運びについては解決した。

ただこの場合、魔法の使用は子機である栞(ケルン)から親機のグリモア(バオム)へ魔法発動申請をしなければならない。
その際、意識会話での申請は出来ない為に音声会話による申請が求められる。
申請後発動までのタイムラグは規模によって変動するものの最短1秒〜十数秒かかる。
通常戦闘であれば全く影響ないのだが本来の戦い方とは違うから動きに若干のズレが生じてしまう。

山道から外れ、草を掻き分けながら魔力反応を辿る。
少し入った所に開けた場所があり、そこには小さな結晶が浮かんでいた。

〈をいをい、冗談じゃねえよ。
マスター、とっとと現地点から離脱しな〉

『グリム、これを知ってるのか？』

〈俺の知る限り最悪な一個だ。
こいつの名前は悪意の火(ユーベル・フランメ)古代ベルカ戦乱時代の負の遺産だ。
こいつは、所有者の意思に応えて敵と認識した相手を焼き尽くす鬼火だ〉

「今は一応、封印が解かれた訳じゃなきそうだ。
念のため、もう何重か封印処理して回収しよう。
ーーーそろそろ、僕も決めないとかいないのかな」

〈マスター？〉

鈴里の呟きにグリムは心配そうに声をかける。
しばらく悩んだ後、栞を結晶に向ける。

「グリム、二人に連絡を。
こんなもの見つけてしまった以上隠れ続けるのも難しい。
潮時です。
地球を発ちますので二人には荷造りを任せると」

〈マスターはどうするよ〉

「僕はこれを封印処理し次第、聖王教会にこれを届けに行きます。
負の遺産とはいえ、戦乱時代の代物なら喉から手が出るほど欲しい
だろうから恩を売っておこうかなって」

グリムは命令を受諾すると栞を介して封印を開始。
同時に他者への念話を始める。

封印の間、鈴里は今後のことを考えてため息をつく。

（まっさか、うっかりこんなもの見つけちまうとはちょっと緩んで
たのかな？
まぁ、ミスはあったけど潮時なのは間違いないか。
彼女のこともいい加減何とかしなくちゃいけないし）

居候の一人を思い出し、少しだけ胸が苦しくなった。

0．5話（後書き）

更新が遅れた割に長くなくってすみません

毎日の更新は難しいですが気長に待ってください

1話

悪意の火（ユーベル・フランメ）の封印、海鳴からの出立から早いことでもう5年。
え、飛びすぎ？その期間見せろ？
仕方ないじゃない。こうでもしないと本編に進めないの。
仕方ない、代わりと言ってはなんですが簡単に今までどうしていたか説明しよう。

あれを封印した後、その足で直接聖王教会へ向かった。
そこで通りすがりのシスターに声をかけ、悪意の火について報告するや否や、不意打ちを喰らい拘束されてしまった。

何でもこいつは元々聖王教会が管理していたのだが、五年前に聖王の聖遺物が盗まれた際に紛失したもので、どうやらこのシスターには犯人と勘違いされたらしい。
いやまず、犯人なら返しに来んだろと事情説明を済ませ釈放された際散々いじってやった。
ちなみにシスターの名前はシャッハ・ヌエラ。
教会で騎士の称号を持つベルカの魔導師だった。

シャッハ繋がりで、カリム・グラシアとヴェロッサ・アコース義姉弟とも知り合えた。
ちなみにこの三人は一応俺の会いたがっていた八神はやてとは友人とのことで、その伝で対面することができた。
その折、彼女（初代リインフォース）を連れて行き再開させる事も忘れなかった。
詳しい事情を省いて経緯を説明して長く会わせられなかったことを謝ると、八神はありがとうと礼を述べた。
感謝されてしまってはこれ以上の謝罪は不要だろうと判断した。

その後彼女は八神の時々八神家で寝泊まりするものの元に戻らず未だに俺の側に居る。
彼女が俺と共に暮らしたいと言い出した時の八神のあの顔はあんまり思い出したくない。

さて、話を戻して。
無事遺物を届け終わり転移で地球に戻る。
中継ポートを使用しない違法転移の為に慎重に帰宅。
すでに荷造りを終えた居候二人を引き連れ転移した先は、ミッドチルダの首都から遠く離れた山間部でネルケという名前の、次元航行艦に乗り込む。

次元航行艦とはいえ当時は航行は不可能で内部設備が辛うじて生きて居る状態だった。
まあ今現在は復旧どころか改造を重ね管理局の最新鋭艦にも引けを取らない物に仕上がった。僕たちはそこを拠点に一応聖王教会に協力する形で聖遺物や古代ベルカ関連の遺失物（ロストロギア）の回収を生業として生活を始めた。

管理局で働く気はないかと八神から誘いを受けたがやんわりと断った。
グリムと出会った時のから管理局とは度々やり合っているから言えることだが、どうも管理局員は口を開けばやれ管理局だ。武器を捨てて投稿しろだのやれロストロギア不正所持の疑いで逮捕するだの皆が皆そういうわけじゃないのだがステレオタイプの言葉しか喋れん癖、やたら正義感が強い上に正義の反対は悪であり、自分は悪を絶つ者だなどと勘違い甚だしい厨二病思想の持ち主ばかりだ。
悪い奴ばかりじゃ無いんだがと呟く俺に八神は苦笑いを浮かべる。
黒い噂の絶えない組織だがそれがすべてじゃ無い。

局を好いている八神はあまり素直に肯ける内容じゃ無い。
「取り敢えず入局する意思はないが、力になれる事があれば何でも言え、同郷の友人のよしみで安く頼まれてやる」
それを聞いて嬉しそうなんな顔をした八神に不覚にも一瞬ドキッとしたのは誰にも秘密だ。

そんな事もありつつ、聖遺物回収をする中知り合った連中もいるのだがここは割愛。
いつか話す機会もあると思う。

「そして今、俺はーーーーネルケ内の私室で書類仕事を一段落させ一息ついている所だ」

「先ほどから何をブツブツと一人でしゃべっているんです？」

「ああいや、何でもない。
ただの日記だよ。
それより何か用だったかい、アイファ」

アイファというのは十年前の闇の欠片事件の際に現れたマテリアルと呼ばれる高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやての姿を模した意思を持った闇の書の残滓が産んだ構成素体の内の理のマテリアル星光（シュテル・ザ・デストタクター）の殲滅者の事だ。

事件の時、偶然ボロボロになり消えかかった彼女を発見してしまった。
見てしまった以上、見過ごして消えられるのも寝覚めが悪い。

そのまま彼女を抱き上げかに連れ帰ると治療を始めた。
初代リインフォースの時使用したプログラムを利用して彼女の意識

をそのままに構成体を変換して行く。

そうして生まれ変わった彼女は第一声、礼もそこそこに他のマテリアル達の救出を願った。

乗りかかった船と了承し頑張ったものの他の王と力のマテリアルの回収（救出）は叶わなかった。

一見、冷静そうに見えて内に熱を持つ彼女にマテリアルとしてのでわなく一人の存在となった記念にベルカ語で熱意を表すアイファーから名付けた。

それ以来彼女は俺の身の回りの世話を良くていてくれる。

本人は家賃代わりと言っているが、それだけではないんだろう。

「聖王教会とアインスからのメールが届いてます」

「聖王教会の方はどうせ報告書だろうから先にアインスのから見ようかな」

開いたアインスのメール内容は俺を驚かせると同時に、ようやく叶ったのかと嬉しい気持ちにさせてくれる内容で、聖王教会のメールの内容も、このメールに関係するカリムからの呼び出しの内容だった。

2話

ミッドチルダ北部にある聖王教会。
そこに俺の友人達がいる。
言わずもがな、カリムとシャッハだ。
ヴェロッサだけは管理局の本局捜査部で捜査官をやって居るのでここで会う事はまずない。
だが、アイツはお茶目的によくネルケに来てはアイファにちょっかいを出すからその度俺が締め上げている。

さて今回、その聖王教会に呼び出されたわけだが、その理由というのもカリムの持つ稀少技能（レアスキル）、預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）による預言についての話があるとのことだったが・・・。

「厄介ごとの匂いがする」

〈ぎゃはは、マスターのそーいう嗅覚は敏感だからな。
十中八九大ー当たり、ジャックポッドウッ！？〉

「やかましい、ちょっち黙らんかい」

〈へっへっへ、がってんマスター〉

グリムを黙らせ、教会の敷地に入ってすぐに見知った顔を見つける。
こっちの顔を見つけると歩みよってきた。

「お久しぶりです、捕獲者（イェーガー）鈴里」

「その呼び方やめろ、固っ苦しいのは苦手なんだ」

「お似合いだと思いますよ？」

ヤダヤダと手のひらをひらひらとうんざりした様子で振る俺をクスクスと笑うには、初対面で俺を叩き伏せた教会で武闘派猪シスターで知られるシャッハ・ヌエラその人だ。
この五年で随分と世話になったと思う。

戦闘者として未熟な俺を鍛えてくれたのはシャッハで、その師弟関係は今でも健在で、互いの、と言うかシャッハの時間がある時偶に稽古をつけてもらっている。
馴染みの三人ではヴェロッサに次いで二番目に交流が深いと思う。

「挨拶はこの位で、騎士カリムがお待ちです。
騎士はやて達も既に到着されてます」

シャッハに先導されカリムの執務室へと向かう。
ここに来るのもおおよそ三月振りくらいだったか。
大概は通信で済んでしまうし、教会自体に来ることも少ない。

会いにくる度に自分ばかり除け者に二人と仲良くしていると拗ねるカリムを宥めるのが習慣になっている。
その拗ねた様子が可愛らしいからあえて通信で済ませているなんて口が裂けても言えまい。

「捕獲者鈴里をお連れしました」

執務室のドアの向こうから部屋の主が入って、と返してくる。
その声に従い、シャッハはドアを開け入るよう促す。
俺が部屋にはいるとそこにはカリムとはやて、リインフォースアイ

ンス。
そしてもう一人見覚えのある男が座っていた。
「おーおー、クロノンではないか久しぶりー」
「ああ、次元の海以来だな」
男の名前はクロノ・ハラオウン提督。
局の次元航行隊で現在はＸＶ級艦船クラウディアの艦長だ。
妻と幼い双子を抱えたお父さんで単身赴任中だ。
優秀な男で周囲からの信頼も厚い。
俺に言わせれば苦労人のお兄ちゃんって感じだがな。
「鈴里くん、それ十点」
「八神、人の心を読むな」
「鈴里くんが分かりやすいんよ。
そろそろ付き合い長いしこれ位できて当然やで」
アホなことを言ってる八神を放置して空いていた席に腰をかける。
程なくしてシャッハがティーセットを持って戻ってきた。
人数分の紅茶を入れると部屋のすみに控えた。
部屋の窓が閉じられ、暗くなる。
さーて、鬼か蛇かどっち出るのかねぇ。

3話（前書き）

更新遅いくせに、相変わらず短いです

3話

カリムによる預言の内容は以下のものだった。

『旧い結晶と無限の欲望が交わる地
死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る
死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち
それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落る 』

前半二行の意味については現時点では何とも言えないが後半二行については解読可能だ。

中つ大地の法の塔、つまりミッドチルダの時空管理局地上本部が何らかの方法で堕とされる。
そしてそれを切っ掛けに本局にも被害が及ぶと言う管理局発足以来、未曾有の大惨事になりうる事件の予言だった。

まあ、死せる王と無限の欲望の名に関しては大凡の検討はつく。

「聖王サマとマッドサイエンティスト絡みでなんか起こるのは間違いなさそーだな。
となると彼の翼ってのも大体何なのかも予想ができるな」

予言の話が終わり、部屋が明るくなると俺は口を開いた。

「ええ、死せる王は恐らく聖王の事でしょう。
そうなると翼というのは古代大戦時代の兵器だと思われます」

カリムも同じことを思ったらしい。

あの時代の代物だから碌でもない、頭の悪い仕様なのは間違いない。
だがそんなものとなるとすでに発見されてても不思議でないのだが、
どうやら教会の二人に心当たりはないらしい。
これは戻ったら調べる必要があるかね。

「それで、俺をここに呼び出した理由は？
まさか、預言みて解釈し合いましょうなんて言う為に呼んだのか？」

「それこそまさかだ、この預言は管理局の上層部も目にする。
この事件は何としてでも阻止しなければならない」

「そこで、ウチらはこの事件を専門に解決する臨時の部隊を設けることになったんや」

クロノの言葉を引き継いで八神はとんでもない事を言った。
いつ起こるともしれない事件の為に態々新部隊の設立。
詳しく聞くと、どうやらかの三提督も裏で関わっているとの事だ。

〈おいおい、いくらなんでも職権乱用が過ぎやしないか？
ましてやあの地上に本局の部隊をおっ建てるたぁ、きっついぞ～〉

「表向きは実験部隊として一年の期限付きで地上における機動性に富んだ部隊、という事で設立する予定になっている」

「それで、俺にどうしろと？」

言いたいことは、分かっているがここは本人達の口からハッキリ言ってもらいたい。

「鈴里には、聖王教会の協力者として古代遺物管理部機動六課に出

向して欲しいの」

「今色んな裏技使うて部隊に優秀な人材集めてるんやけど、も一つ駄目押しでとびきり優秀な人欲しいんやけど部隊制限やともうこれ以上は無理やであとはもうコネに頼るしかないねん。
頼みます、馴染みの好で助けてくれんかな？」

両手を合わせて頭を下げる八神。
五年来の付き合いの彼女の真剣な頼み、引き受けるのはやぶさかではないのだが・・・。

「何か問題でもあるのですか？」

悩んでいる俺にカリムが尋ねてくる。
問題が無い訳じゃない。
と言うのも俺の仕事に問題がある。

「仕事？
ああ、ロストロギアの回収作業やったっけ？」

「ウチのメンバー上、どうしても俺が出張んなきゃならないことがある」

3話（後書き）

誤字脱字等の指摘も待ってす

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6891z/

魔法少女リリカルなのは～魔導書《グリモア》の魔導師～

2012年1月12日01時45分発行